

---

# 闇に踊る物語

あくた咲希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇に踊る物語

### 【Nコード】

N2246Z

### 【作者名】

あくた咲希

### 【あらすじ】

別名義時代に書いたお話です。一時期サイトに載せていたような記憶。

稲穂は、やさしく老いた父母とともに暮らしていた。そこへ現れたのは、ほたる火をまとった、全身傷だらけの青年……。彼は、名を速風といった。

連載全14回。

ちよこつと色っぱい表現と、残酷シーンあり。ご注意ください。

## 序

黄泉よみのとびら。根の国に通じる道。

国産みの、神産みの母たる女神　死した妻を追い、国産みの、神産みの父たる男神は黄泉の国を訪れた。

しかし。

ふたりが夫婦だったのは、今は昔の話。

根の国の女神と天つ男神は袂を別ち、黄泉のとびらは閉ざされて、黄泉の闇は深き地下に追いやられ……。

天つ男神は川原にて襖をおこない、貴き三柱の神を産んだ。

左目より日輪。右目より月輪。

そして息吹より生まれし神は、その産声で母を欲した。

日輪たる姉神は、不憫な弟神を母がわりに愛し。

月輪たる兄神は夜の闇で、黄泉のとびらを隠した。

\*

「もう、私には抱かれぬというのか？」

若き男神の吐息は猛々しく熱く、彼が呼吸しているというだけで女神の胸はじりじりと締めつけられ、焼け焦げるようだった。

無意識にかぶりを振りそうになるのをこらえ、唇を引き締めて頷く。彼が絶句した気配はなかったが、それでも一瞬、空気の流れが止まったように思った。

女神は顔を上げ、誰よりも愛しい弟神を見つめた。

「すべては秩序のため。わたくしは、手本となるべき神」

情に溺れてはならない、自分は、この天上の原を統べる神なのだから。

ひとたび決意してしまえば、彼女の意思はなににもまさる誓いとなる。

「姉上は、私がお嫌いか？」

希代の乱暴者と揶揄される弟神のおもてにふと現れた、すぎるよ  
うなまなざしに一瞬どきりとしたが、眉を動かすことなくやんわり  
否定する。

「わたくしがあなたを嫌いになるということはけしてありません。  
そう、けして……ただ、心のほかで通い合うことはやめましょう。  
そう申しているだけです」

「体を合わせずして何が通い合うと？ 想いは空気を伝わるとでも  
？ ばかな。触れなければ伝わらぬ」

弟神は片腕で空を薙ぎ、白い歯を剥き、鼻孔を膨らませた。彼が  
怒ると、地までもがわななくようだ。

「わからぬことを申されるな。わたくしはあなたを愛しています。  
それでじゅうぶんと受け取られませ」

今にも抱きすくめようとしてきた弟神を逃れ、女神は、そのつま  
先から光の筋を立ち昇らせた。やわらかな衣の裾が鮮やかに色移り  
かわり、やがて風をはらみ大きく膨れ上がる。

「姉上！ ばかな、ばかな あなたをなくしたら、私は光を失っ  
たも同じだ。なぜ、私にそのような仕打ちをなさるのだ」

懇願にも似た弟神の切ない声音が、姉神の誓いを揺るがせようと  
する。

女神は白々とした手をつと伸ばしかけ、体の奥にばかりとした空  
洞を感じた。

(わたしとて……)

統治神としての自覚に隠れた本心が声になる前に深呼吸をし、自  
らが生んだ輝きに同化しようとした。

その時だった。

鈍い衝撃が全身を襲い、光の消滅した足もとに女神はくずおれた。  
閉じた眼の裏に、営みを止めゆく心臓にぬるぬるとした暗い長虫  
が絡みつく幻覚が見えた。たおやかなのどは悲鳴を上げることでも  
できず、またたくまに硬直してゆく。

女神は遠のく意識の中で、弟神の名を呼んだ。

しかし。

かすれた声は、長虫に食われてしまった。

かわいいいくしゃみがひとつ、清水の跳ねる音とともに夜の曇天にこだまする。

「うー、寒い」

表面のなめらかな岩にしがみつくようにして、少女ははだかの肩を震わせた。

「おとうさん、おかあさん！ もう、出るから！」

ざば、と音を立てて冷たい水から脱出する。

川辺の小屋から、老いた両親が手に布切れをたずさえて小走りに駆けてきた。その布切れで、女の子のくせにふくらみの足りない体をひととおり拭くと、今度は丁寧に手足を撫ではじめる。

それよりも早く着物を着せてほしいと思いつつ、むしる昼に水浴びさせてくれればいいのにと内心反抗しながらも、少女は親のなすままになっていた。

すでに七人の娘を手もとから失っていて、先もそう長くない老夫婦は、ただひとり残った末娘を蝶よ花よと育てている。

それはいわば手飼いの蝶であり、花であり……。

偏り、ひたむきすぎる愛情は時として狂気をはらむ。撥ねつければ、あたたかな手もたちまち獐猛な牙に変貌するのではなからうか。少女はそんな妄想に怯えていた。

だから、小さな籠の中でしか飛べないことに不満はあるにしても、両親の前で顔に出すことはしない。

かわりにいつも、なるたけ笑顔でいることに決めていた。その成果というべきか否か、どんなに機嫌の悪い時でも仮面をかぶるより早く自力で微笑を頬に張りつかせるといふ芸当ができるようになって、少々、複雑だったけれど。

「おお……晴れてきた。月が見えるよ、稲穂<sup>いなほ</sup>」

父の白く垂れさがった眉のかけから糸のごとき双眸が見上げた先

を、まず母が父とそっくりな眼差しでたどり、少女もまたそれに倣った。

生い茂る樹々のはるか上空にぽかんと浮かんだ、端のほんの少しかけた円は青白く、透きとおるようにひっそりとしている。

(今夜は一段と淋しそう)

稲穂は眉を八の字にさげた。

(抱きしめたい)

太陽は眩しすぎて目を向けられないけれど、控えめな光を放つ夜の月はやさしく、日のあるうちに姿を現す月は頼りなくて、無性に惹かれた。

(あなたは太陽の影。ほんとは、太陽のそばに行きたいのよね)

しみりしているうちに服を着せられ、両手を引かれて、稲穂は小屋の戸口をくぐった。

(あたしは、あなたの影なんだわ。きつと)

粗末な屋根は穴ぼこだらけのくせに空までは見えなくて、ただ、冬の終わりの風を迎え入れてギシギシと鳴っている。

背格好までよく似た父母に挟まれて、寝床に体を横たえながら、少女は月を想った。

\*

(朝、よね?)

さめたばかりの目をこすり、稲穂は横になつたまま首をかしげた。まるで厚い布きれで、小屋ごとすっぽり覆われたかのように視界が暗い。起き上がってまわりを見回してみるが、そばにいる両親の顔すら見えない。

まだ夜中かしらと言い合いながら、とりあえず火をおこして、戸口に置いた二段の器の中を確かめた。上はからっぽで、下には水がひたひたに張っている。

上の器にはごく小さな穴があいていて、寝る前に水をいっぱい

入れておくと次に起きる頃にはすべて下の器に流れ落ちているはずで、やはり今は朝らしかった。

「太陽が寝坊してるのね」

珍しく両親より早く起きた稲穂が呆れて言うと、父も母も皮のあまったのを鳴らして笑った。

しかし、この不思議は気味が悪かった。

とはいえ、誰かに答えを求めようにもここには隣人すらおらず、普段どおりに一日をはじめよりほかはなく……。

朝餉の後片付けは稲穂の仕事で、水浴び場より少し下の、川が湾曲して浅くなつたところで洗い物をした。

木をくりぬいて磨いた椀と、細い枝を集めてきて皮を剥いで揃えた箸は、砂利でこすつたあと水の流れに任せてすすぐ。そのまま流されていった箸は数知れず、今では水が淀まない程度に石を積み上げて、もしもの時のために備えている。

でも、ふが悪い時も当然あるもので。

箸は指をすりと離れ、あツと声を上げたときにはすでに堰の隙間を突破し、川下の暗闇へ消えてしまっていた。

稲穂は、手に残つた四本を炎のあかりに照らして肩を落とした。流れていったのは、手で持つ部分に赤土をすり込んで色をつけた彼女お気に入りの一膳だった。

（追いかけなきゃ。早く）

傍らのあかりに手を伸ばしかけて、ふと気づいて引つ込めた。携帯用の焚き火ではあるが、これは小さな石の碗底に据えつけた火種に木片をくべただけのもの。取っ手がついているわけではないので時間がたてばたつほど熱くなって、とても持ち運べるものではない。（しかたないわ）

ほかの食器まで流れないように置き場所をかえて、稲穂はすつくと立ち上がった。だめでもともと、見つければ大幸運だというぐらゐの気持ちで走り出す。

幸い、彼女には度胸があった。それと、暗がりでも多少は利く、

ころんとした愛らしい黒目がちの瞳も。

飛ぶように駆けて、砂利ばかりが目立つようになつてきた頃、  
指す先でなにか影が動くのをみとめて稲穂は足を止めた。目

ちゃらり、ちゃらりと川底ごと水をかきまぜるような音が聞こえてくる。

いまだかつて（焚き火の碗に触れた以外に）危険に遭遇したためしのない箱入り娘は、及び腰になることもなく、じっと目を凝らして得体の知れない黒い影を見た。

人かどうかさえもわからない。

そもそも両親以外に人を見たことがない稲穂である。七人の姉についてさえ、時折り話に聞く程度。

だから、好奇心がうずいた。危険など、みじんも心配しなかった。ともかく相手に気づかれないうようにと足音をしのばせ、一歩、また一歩と、影の輪郭がはつきり見えるところまで近づく。

すると、ずっと大柄だが、影もどうやら父母や自分と同じ人の形をしているらしいことがわかった。

（……？　なんだか、苦しそう）

ハッハツとかすれて破裂する息遣いが、夜と同じに冷え込む空気を伝わって彼女の鼓膜を刺激する。

「だいじょうぶ？」

思わず声をかけると、低い唸り声とともに影がぐらりと揺らめいた。

「ひゃあっ！」

胸もとを強く引き寄せられ、少女の体はくの字になって宙を飛んだ。

「だれだ」

押し殺した声が血の匂いとともに目の前で吐き出された。

稲穂は顔をそむけ咳き込みながら、服をつかむこぶしに手を触れた。こぶしはひとつで少女の両手にあまるほど大きく、指の関節はひびくひびくとしていて、小屋のあるところよりもさらに上流に

眺むる巖のようだった。

常ならぬ気配を感じ取り、稲穂は唾を呑み込んでそろそろと正面を向いた。

殺気立って光る二つの目が自分をにらんでいる。少女は叫びそうになった。

「なんだ、人のことか」

着物のいたるところに血を滲ませた男は、気を失わんばかりに顔を引きつらせた稲穂を確認すると、にわかには表情をやわらげた。

「箸が流れてきたから、誰かいるとは思っていたが」

すっと腰を降ろし、あぐらをかいてその上に彼女を座らせる。

「この暗いのに箸を追ってきたのか？ よかったな、そら。とっておいた」

「あ、ありがとう」

呆然としながら差し出した両手にひと組の箸を受け取って、握りしめてようやく稲穂は自分を取り戻した。

目をしばたたかせながら、血で汚れていてもそれとわかる端正な顔を見上げ、先ほどもまでの鬼気迫るものはなんだったのかと訝しんだ。それと同時に、この人はどういう人なのかと考えた。

男は、父ほどに老いてはいないが深みのある低い声でしゃべり、白くはないが母のように髪を長く垂らしている。髪は乱れてはいるものの艶やかだ。耳たぶや手首足首では、きらきらした飾りが涼しい音を立てている。

手を胸にあてて、稲穂は遠慮がちに口をひらいた。

「なんて呼んだらいい？」

「ん？」

質問の意図がわからなかった様子で、男は目をまるくして首を傾けた。

稲穂は慌てて言い直す。

「あのっ、あなたが誰なのかわからないから、なんて呼んだらいいかと思ったの」

「ああ、名を知らぬと話しにくいものな」

男は得心がゆくと、少女の頭を撫でつつ咳払いをした。

血の塊を川の流れに吐いてから、答える。

「私は速風はやなぎ」

「はや……なぎ？」

「ああそうだ。はは、呼びにくいか。おまえの名は？」

「ええと。稲穂」

「稲穂か。きれいな名だな」

速風は口もとをほころばせた。

「ところで稲穂、もしよければおまえの村へ案内してくれないか。

体はいいのだが、着物が欲しいのでな」

「むら……は、わからないけど、服ならおかあさんがつくってくれ

るわ」

「そうか」

速風は片手で軽々と稲穂を抱え上げ、機敏な動作で立ち上がった。腰に佩いた剣の装飾がかちりと鳴る。もとはまっすぐだっただるう鞘はところどころが弾けて、青みがかった刀身がちらりと覗いている。

「かみのほうへゆけば、行き着くか？」

「うん。川のすぐそば」

「わかった」

もはや速風に苦しそうな気配はどこにもなく、川上つづくゆるやかな傾斜を、確かな足どりで歩きはじめた。

稲穂の耳のすぐそばで、彼の穏やかな吐息が聞こえた。血の匂いは消え、かわりに、萌え出たばかりの若芽に似た香りがする。

（春がきたような感じの人）

稲穂は本当は自分で歩くつもりだったが、驚くほど安定した抱かれ心地につい、うつらうつらとしはじめた。

（……あったかい……）

彼女が大きく舟を漕ぐと、速風は声をひそめてくつくつと笑い、

小柄な体を両腕に抱え直した。

「着いたら、私もひと眠りさせてもらおうとしたら、」

見知らぬ男を伴って帰ってきた、というより、彼に送り届けてもらう形になった末娘を、両親は顔を真つ青にして出迎えた。

「なんのためにこの山奥で暮らしておると思っておるのじゃ……！」  
父も母も涙を流しながら、娘の無事を確かめるように手と言わず足と言わず、体じゅうを撫でまわす。

稲穂は面食らい、ぼろぼろの服で傍らに立つ速風を見上げた。

「私に説明を求められても困るよ」

彼は後ろ頭をかき、適当な岩に腰かけると、左手首に巻いていた金輪の束を外して老夫婦の眼前に突き出した。

「これと、新しい服を交換してくれぬか」

面食らったのは、今度は父母のほうだった。

黄金などそうそう拝める代物ではない。ましてや服の代金になど、釣り合わぬどころの騒ぎではない。

「あなた様は、どちらのおおきみ大君様で……？」

「そう畏まるな。ただの旅人だ」

狼狽する老人ふたりに苦笑しつつ、速風は右手首の金輪も抜き取った。菱形の金や半透明の玉を連ねた両足首の紐も解いて、稲穂に握らせる。

「酒があれば持ってきてくれ。そうだな……、稲穂は舞えるか？」

「歌をうたってもらえるなら、少しなら」

大好きな踊りを望まれて、少女の頬がぱっと色づいた。その様子を見て、速風はオヤという顔をする。

「存外、娘らしいじゃないか。さっきはこどもなどと言ってすまなかつたな」

「えっ？ あたしはおとうさんとおかあさんのこどもよ。速風は間違っていないわ」

稲穂の返答を聞いて速風が目を丸くするより先に、老夫婦が糸目

を三日月ぐらいにみひらいて悲鳴にも似た歓声を上げた。手を取り合い、白い頭髪を揺らして喜び合う。

「あなた様が、あの速凧のみことか」

「なんだ、私を知っているのか」

速凧は半跣を組み、袖で頬を拭った。

その横で、稲穂がきよとんと立ち尽くしている。

「おとうさん、おかあさん？」

「稲穂や。この方は、わしらの叔父にあたるお人じゃ」

「おじ。おじって、なに」

「わたしたちの父様の弟君でいらせられる。生まれはわしらのほうが先じゃがの。ついこのあいだまで母神を恋しがって泣いておったというのに、なんと、立派になられたことじゃ」

「えっと……おとうさんとおかあさんの、おとうさんの、おとうと？」

父の言葉をゆっくりと反復しながら、最後の疑問は速凧に向けた。彼はというと、なにやら気まずそうな顔で顎を撫でている。

稲穂は今にも手から取り落としそうだった金の飾りを父に押しつけてから、速凧の膝に寄り添って顔を覗き込んでみた。

「よくわからないわ。どういうこと？」

「私の父と、おまえの曾祖父は同じだということだ。私はおまえにとつての大叔父だな。稲穂……、おまえは物を知らぬな」

「……ごめんなさい」

「いやいや」

速凧は、混乱しつつしょんぼりする少女の髪をやさしく撫でてやっただ。

「私とて、血統などあまり考えたことがないからな」

稲穂にというより虚空に呟いた彼の目は、いちど暗い空に向けられ、やがて小屋の脇に焚かれた炎に落ち着いた。

彼の瞳の中で赤と黄が揺れている。夕陽の色に似ていると、稲穂は思った。

(でも、夕陽はきょうは見れないわね。こんな暗い空だもの)

二段重ねの器を一瞥し、稲穂は今の時刻を知った。火のあかりで過ごしていると、時の流れが止まったように感じてしまう。

しかし時は絶えず過ぎるもので、今頃はいつもなら母の手伝いで乾燥させた木の実を磨り潰して団子を作り、天日干ししている頃だった。母と父の時間感覚もまた麻痺している様子で、日常の仕事をすっかり忘れてしまっているようだ。

(ま、いつか。お酒、お酒)

稲穂は小屋の裏にまわり、甕にびつちりとかぶせられた布のふたを慎重にはがした。

服より厚めに織られたそれに鼻をつけて嗅ぐと、頭の中がふわんと軽くなって楽しい気分になる。両親に見つかれば咎められることだったが、きょうは、ふたりは来訪者と談笑していて娘のしわざには気づきそうにない。

調子に乗って、何度も深呼吸してみた。胸がぼうつとあたためられてゆくようだった。そのうち鼻が利かなくなり、見るものがぐにやり、ぐにやりと歪みはじめてしまった。

これには、さすがにまずいと稲穂も思った。

甕の中身だけはひっくり返さないようにとその場を離れ、ふらふら、ぺたん、と雪解け水でぬかるんだ地面に尻もちをつく。内腿がひんやりとした泥に濡れて気持ち悪かったが、いったん全身から力が抜けてしまってもう立ち上がれない。

(うわーあ、どーおうしょお)

思考までもれつがまわらない。

しかも、だんだんと愉快になってきた。

(ふふー。ぐる、ぐる、ぐる……)

指で地面をなぞり、うずまきを描く。

(ひとおーつ。ふたつ。みいっつ。よっつ。いつーつ。むっつ。  
ななあつ、やあ)

八個目のうずまきを描き終わるやいなや、何物かが稲穂の細い左

足首に巻きついてきた。

ぬめりのある、うるこのざらりとした感触。

とろとろに溶けそうな脳みそでも、その正体はすぐ知れた。

とっさに振り払おうとして足首に目をやると、炎のあかりでだるうか、体に苔を生やした蛇の丸い目が赤々と輝いていた。蛇自体はさほど苦手でもなかったのだが、よく熟れたほおずき鬼灯のような眼に見つめられて、稲穂は一瞬、身動きが取れなかった。

蛇はちろちろと先の割れた舌を覗かせながら、鎌首をもたげ、酔いのすっかりさめた少女をじつと観察でもしているかのよう。

稲穂が身じろぎすると、するすると身を滑らせて地面に降りた。

しかし、彼女のそばを離れようとはしない。

「おまえ……まだ寒いんじゃないの？」

蛇が去らないのを不思議に思っ、稲穂は小声で問いかけた。

「速風かしら？ あの人の匂いにつられて、土の中から出てきちゃったんでしょ？」

すると蛇は緩慢な動きで茂みに向かい、しばらく葉や小枝を鳴らせていたが、稲穂が立ち上がる頃には完全に行方をくらましていた。「うん、もう少し寝てたほうがいいわ」

稲穂は腕組みをして二度ほど頷くと、服の裾で指を拭ってから息を止めて甕を覗き込み、瓢をそつと差し入れた。なめらかな液体を少しかきませ、手近にあった深い椀に注ぐ。

客人用の酒を地面に置くのはなんとなく気が引けて、稲穂は片手でどうにか元通りふたをしめ、中身をこぼさないように注意して速風のところへ戻った。

「すまぬな、ありがとう」

椀を受け取り、すぐに飲むでもなく、速風は稲穂の姿を心配した。「えらく泥だらけだな。ころげでもしたか？」

「え。ちよ、ちよつと足もとが狂っただけ。だいじょうぶ」

「でも、血が出ている」

指摘されてはじめて、稲穂は左の足首が赤く染まっていることに

気がついた。

蛇が触れた場所だ。知らぬまに噛まれてもしたのだろうか。しかし痛みはなく、じつとりとした熱もない。

「だいじょうぶよ」

「おまえたちは、怪我で死ぬことがあるのだろうか？」

速凧は腕を老父に預けると、老母にとりあえずの衣を所望した。

「私も汚れを落としてくる。こい」

彼は稲穂を抱き上げ、あかりもなしにせせらぎのほうへ向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2246z/>

---

闇に踊る物語

2011年12月11日08時50分発行